〔泰平年表 有德公〕享保八年十一月廿日ゟ十二日に至、九州大地震、

〔半日閑話 四編一〕八月〇安永三年

廿日、午ノ時大地震なり、午時に震ふ、又酉時に震ふ、廿一日、午時に又小く震ふ、

十月

廿四日、晝七ツ時分、地震大なり、須臾にしてまた少々震ふ、

〔半日閑話 四編五〕一同〇文政二年六月 廿二日、美濃、伊勢、近江邊、大地震有之、美濃大垣餘程崩れ、人馬損じも有之よし、專ら風聞なり、

〔愚聞當世雜話 天ノ下〕大地震

今歲嘉永七甲寅六月十四日より廿日過るまで、東海道伊勢路、桑名四ケ市ノ宿より、關、庄野、龜山邊、大地震にて、人家を震潰し、山崩れ土地さけて、往來も止りたるよし、此地震、伊賀伊勢より、五畿內邊大ゆりにて、南都諸社諸寺の石どふろふ、鳥居の類一ツものこらず傾き倒れ、其餘震播州邊も動きたるよし、御醫師八島玄仙御勘定方古谷源八、御徒小頭熊谷齊兵衞、同御供方小野峯三郎、〇八島以下並伊豫宇和島藩士 其外部屋中間、御六尺の類、皆江戸を六月初に出立し、伊勢路にて、右の地震に出會、宿すべき旅籠やも過半ゆりつぶれ、四五夜は野宿せしよし、食物の類賣家もなく、食にはなれし日も有しよし、山道などにてゆり出せし折は、道もあゆみ難くて、木などに取附居たる事もありたるよし、〇下略

〔武江年表 九〕安政二年十月二日、細雨時々降る、夜に至りて雨なく、天色朦朧たりしが、亥の二點、大地俄に震ふ事甚く、須臾にして大厦高牆を顚倒し、倉廩を破壞せしめ、剩その頹たる家々より火起り、熾に燃上りて、黑煙天を翳め、多くの家屋資財を燒却す、神宇梵刹は輪奐の美を失ひ、貴賤の人家は鱗差の觀を損ふ、尊卑の大患、東都の物恠何事か如之、凡此災阨に罹りし儔、家族に離れて